

千刈狸の呟き

小学生の時、年に2回か3回、巡回映画鑑賞授業というのがあった。二教室の間仕切りを取り払って、机と椅子を廊下に運び出すと三組分の子供が充分に座れる映画館に早変わりした。窓に分厚い暗幕を張って、映写機が回り出すと映画の始まりである。その頃見た映画で記憶に残るのはわずかである。ひとつは、北海道の自然を紹介する内容で、天売、焼尻島のオロロン鳥はこの時に知った。自然が織り成す造形の迫力と美しさに眼を開かれたのはこの映画からであったと思う。次に心に残るのは山岳遭難を取り上げたドキュメントの映画であった。山岳の峻厳な美しさよりも、事故の悲惨さにすっかり心を奪われた狸は、感想文に登山の無益さと失われる人命の重さについて書いた。担任の教師から赤ペンで、厳しい自然に挑む人間の行動をもっと肯定的にとらえても良いのではないか、と評が書かれていたことは今でもはっきりと覚えている。高校生になり、若い数学教師は、大学の頃、山岳部員で冬休み明けの授業では日焼けした顔で山の楽しさを語った。いつか君達を山に連れて行ってやるぞ。まずは近くにある天塩岳へ行こうと言っていた。

学校裏の丘からは流水明けの真青な海の果てに真白な頂が列島のように東から知床岳、硫黄山、羅臼岳、遠根別岳と浮かぶ景色は美しかった。いつか山へ行ってみたくて強く思うようになった。高校2年の夏に転校した。3年生の夏休みの行事で海と山に分かれてのキャンプがあることを教えられた。参加は自由だが、どちらにすると聞かれ、迷うことなく山班を選んだ。初めての山行きは、嵐に近い豪雨の中、湧駒別温泉を早朝に出発し、ロープウェイには乗らず、下の道を登った。大雪山の主峰旭岳に登頂し、北海岳、白雲岳を経て、高原温泉に下るといふ、今思い返しても相当厳し

～ 山との出会い ～

蝦夷狸

いコースであった。しかもほとんどが、狸と同じ初めて山に登る初心者で、数名の山岳部員と引率教師の総勢50～60名の大集団であった。この山行は狸を山好きに引きずり込むには充分であった。

国語の授業で有島武郎の「生まれ出づる悩み」が教材の時、教師が「木田金次郎は漁師として働きながら画を描いている人だが、君達の先輩に開拓農家をしながら画を描いている人がいるよ」と坂本直行氏のことを教えてくれた。少し前にNHKのEテレ特集で氏の生涯を1時間の番組で紹介していた。

大学生の頃に買った画文集「雪原の足あと」は何度も読み返し、表紙カバーはボロボロになっているが、狸の大事な蔵書のひとつである。

一度だけ氏にお会いしたことがある。北海道の病院に勤務していた時、新聞で個展が開かれていることを知った。唯見るだけのつもりで出かけたが、水彩画なら買えそうな値が付けられていた。1万5千円であった。手持ちは足らなかった。でもほしかった。画の前をウロウロしていたら、氏が近寄ってきて、気に入ってくれたなら持って行って良いよと声をかけてくれた。手持ちが足りなくてと言うと、後で銀行に振り込んでくれれば良いからと名刺に口座番号を書いて画を渡してくれた。その日は、個展の最終日であった。

「夏のポロシリ 1978」と題された3号程の水彩画は私の室にずーとかけられている。北海道の土産によく選ばれる六花亭の菓子の包装に使われている絵は坂本直行氏の作である。もし、六花亭のお菓子をもらうことがあれば、包み紙は乱暴に破らずに見て楽しんで頂けたらと思う。